海外語学研修報告

オックスフォード大学夏期英語研修実施報告

本年度は募集説明会を３回開催したが、参加希望者が８名に留まり、しかも間際に１名が参加を取りやめたため、最終的な参加者は７名（全員が学類生）となった。春からのイギリスの連続テロ事件が大きく影響したものと思う。人数が規定に満たず一時は実施もあやぶまれたので苦労したが、先方の厚意で何とか実施することができた。

８月３日に事前指導会を行い、生活や安全に関する情報、イギリス英語の表現などを含め彼の地で研修を行う際の心構えについて解説を行った。研修先のオックスフォード大学ハートフォード・カレッジでの英語研修は、現地時間で 2017 年８月 26 日（土）から９月 16 日（土）までの３週間に渡って実施された。

授業内容は過去４年間の実績に基づいて決定されたもので、基本的な構成としては、午前中はアカデミックな環境の中で英語の４技能を総合的に活用する訓練、午後は英国やオックスフォードに関する文化、社会、歴史などのテーマについての講義と演習となっている。学修の成果として研修の最後にプレゼンテーションを公開で実施するが、人数の関係で今年はグループではなく個人で実施した。

ハートフォード・カレッジの研修においては、授業とプレゼンテーションの評価を合わせた成績により合格者には研修の修了証書が授与された。全員が無事証書を手にしたことは言うまでもないが、筑波大生のプレゼンテーションは例年高評価を得ていることは強調しておきたい。また、この海外研修はグローバルコミュニケーション教育センターの開設科目で、正式名称は「海外語学研修（英語 A）」である。そのため学生はハートフォード･カレッジでの研修に加え､毎週末に１週間の学習状況をポートフォリオとして筑波大の担当教員に提出し指導を受けた。また研修終了後には英文のレポートの提出が課された。これら３つの総合成績に基づいて当該科目の単位が与えられた。週末の研修旅行は１週目がストラットフォード･アポン･エイボンで２週目がコッツウォルズとブレナム宮殿であった。

学生はハートフォードカレッジの学寮に滞在し、現地学生と起居を共にし、交流を図った。研修後のアンケートによれば、英語によるコミュニケーション能力の増強は元より、実際の生活体験を通じて異文化に対応する自信を身につけることができたものと思う。特に２名の Residential Advisor（RA）は文字通り朝から晩まで勉学や生活面での支援をしてくれたので、学生にとっては大変心強かったはずである。

最後に、本研修は日本学生支援機構（JASSO）の「海外留学支援制度」から８万円の奨学金を、筑波大学の「はばたけ！筑波大生」から２万円の旅費支援を受けることができた。ここに感謝の意を表する。

（久保田　章）



ストラットフォード・アポン・エイボンにて

2017年度キルギス夏期ロシア語研修について

臼山 利信・松下 聖

中央アジアのキルギス共和国でのロシア語研修は、今年度で4回目を迎えた。平成26年度に初めて実施した際は単位認定がされなかったが、2回目の平成27年度からは筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター（以下「CEGLOC」）「海外語学研修ロシア語B」（3単位）として、単位認定されるようになった。今年度も同科目の枠内で実施した。

キルギス共和国は1991年にソヴィエト連邦から独立し、今年で独立26周年を迎えた。同国はキルギス人が人口の7割以上を占めるが、キルギス語とロシア語が公用語とされ、ロシア語は教育やビジネスの言語として、首都ビシュケクを中心にキルギス国内で広汎に使用されている。キルギス人の話すロシア語に訛りはあまりなく、ロシアでロシア語を学ぶのと遜色ないと言ってよい。ロシアに比べると、物価が安い、3ヵ月以内の滞在であればビザが不要などのメリットもある。

今回の研修は、キルギス渡航前に特別にカザフスタンの首都アスタナへの訪問を加えた。アスタナでは2017年5月から同年9月まで万国博覧会が開催されていた。カザフスタンとキルギスは隣国同士で文化や言語も類似しているが、国家体制や経済状況は全く異なる。こうしたことから、カザフスタンを訪問することは中央アジアの多様な側面を学ぶことができるため、アスタナでの研修を追加した。研修実施期間は、アスタナ訪問を2017年9月2日から9月4日まで、キルギス滞在期間を9月4日から9月27日までの約1ヵ月間とした。キルギスでの研修は、JICA系機関のキルギス日本人材開発センター（以下「KRJC」）とCEGLOCの共催というかたちで実施された。KRJCは、本学の学術交流協定大学であるキルギス民族大学構内に設置されている、同国内最大の日本文化発信拠点である。またKRJCは、人文・文化学群開設科目「海外インターンシップ」のインターンシップ先としても提携するなど、本学と密接な協力関係にある。

研修には本学学生のほかに、東北大学の学生も参加した。本学の参加学生は、学群生4名で、東北大学から2名が加わり、合わせて6名での研修となった。また、同時期に実施されていた関西大学の国際理解プログラム（参加者2名）とも、一部合同で研修を実施した。

ロシア語の授業は習熟度別に2クラスに分けて45時間、キルギス語の授業は初級クラスを全員に対して9時間、計54時間受講した。ロシア語の授業はロシア語ネイティブがすべてロシア語で行った。研修の最終課題としてプレゼンテーションを課し、「日本の音楽」、「日本の教育」、「日本の食文化」、「ポップカルチャー」、「仙台」、「つくば」をテーマにし、各自がロシア語で5～10分程度の発表を行った。プレゼンテーションでは、参加学生は教員と現地の大学生を前にして、ロシア語で堂々としたスピーチをし、質問にもロシア語で答えていた。約1ヵ月の研修を経て、

ロシア語能力が大幅に向上し、自信がついたことがうかがえた。

語学研修のほかには、KRJC による異文化理解講座、在キルギス日本国大使館における危機管理ブリーフィング、JICA キルギス事務所におけるキルギス事情講義、国連開発計画キルギス事務所での特別講義などを受けた。またイシククリ州へのフィールドトリップも実施し、JICA による一村一品プロジェクト（OVOP）の現場の視察、青年海外協力隊員との交流など、首都だけの滞在では分からない、地方ならではの社会・経済の現状や課題を学ぶことができた。

そして今回の研修の目玉は、ホームステイである。第 1 回目の研修からホームステイは実施していたが、第 2 回目までのホームステイ期間が 10 日間程度、第 3 回は 17 日間と徐々に日数を伸ばし、今回は現地到着翌日からほぼ全日程の 21 日間をホームステイ期間とした。これは、毎回ホームステイの満足度が高く、参加学生のレポートからもホームステイの学習効果が非常に高いことが読み取れたからである。ホームステイでは一人で現地の家庭に入り、主にロシア語で意思疎通を図ることになる。当然、最初は苦労するが、帰国が近づくにつれ別れが惜しくなるほど交流が深まったようである。

研修費用は KRJC のご厚意とご尽力により、非常に安く抑えられ、渡航費、宿泊費等込みで 30 万円程度におさまった。また本研修では、筑波大学海外留学支援事業（はばたけ！筑大生）により 10 万円の渡航費支援を受けた。有り難い限りである。

研修を終えて、参加学生は「さらにロシア語を勉強したい」、「留学をしたい」、「他のロシア語圏諸国へも行ってみたい」など、語学や海外留学に対するモチベーションが一気に高まったようである。今後もキルギスでの語学研修を継続し、こうした意欲ある学生を多く生み出していきたい。



カザフスタン・アスタナ万博日本館の視察



ロシア語での最終発表

平成 29 年度ロシア連邦サンクトペテルブルグ国立大学 夏期ロシア語研修について

2017 年 9 月 2 日から 9 月 26 日までの 3 週間強、本学の協定大学であるロシア連邦サンクトペテルブルグ国立大学の協力・支援の下、同大学文学部付属ロシア言語文化カレッジにおいて夏期ロシア語研修（自由科目「ロシア語」3 単位として開講）を実施した。本学から 10 名（比較文化学類 3 年生 1 名、日本語・日本文化学類 2 年生 1 名、国際総合学類 2 年生 3 名、生物学類 1 年生 1 名 2 年生 1 名、生物資源学類 3 年生 1 名、体育専門学群 4 年生 1 名、システム情報工学研究科 1 名）が研修に参加した。この夏期ロシア語研修は CEGLOC 開講の授業として単位認定を受け、45 時間の授業時間を確保して研修期間が決められる。人文社会系加藤百合教授（CEGLOC 協力教員）が引率・調整を担当し、週末や放課後などを利用して、ロシアの文化や政治・経済情勢についての研修も付加された。

本年度は研修参加希望者が多かったため、現地での引率・通訳のため、本学 CEGLOC での 4 年間の勤務期間を満了して帰国された直後のアビィヤカヤ･オレーシャ先生が文化研修の際に同行補助された。サンクトペテルブルグ国立大学と本学の長きにわたる交流がこうした共同を可能にしていることは、研修の安定した継続の保証になっていることを特記しておきたい。

参加者は、出発前に、危機管理研修、直前研修等数回の事前研修に参加した。ロシア語履修がまだ数か月である 1 年生をはじめ、ロシア語運用能力が十分ではなかった参加者については、一学期分（10 コマ）に相当するロシア語の補習授業を実施して、1．ロシア語（キリル文字）の読み書き、発音、2. 初級文法についての説明（教科書・教材を配布）、3. 日常会話に必要な表現について集中的に学んでもらい、サンクトペテルブルグ大学のロシア語コースでの学習効果が期待できるよう事前準備を行った。

参加者全員が、サンクトペテルブルグ国立大学の斡旋によりロシア人家庭でホームステイし、生きたロシア語とロシア人の実生活を体験した。ロシア語だけでコミュニケーションをとった家庭が多く、ホストファミリーと毎日会話して意思を疎通したいというのはロシア語学習のさらなる強い動機となった。よく使う語彙や表現について日英対照表をつくってくれる、家庭でもロシア語を教えてくれるなどよい環境だった。

到着翌日に大学でプレイスメントテストを受け、自分のレベルにあったクラスに入り、文法、会話、発音、読解の各科目についてレベル別の小グループで授業を受けた。いずれも適正な授業を受けてロシア語力を大きく伸ばすことができた。3 週間は短期ではあるが海外語学研修の効果は目に見えるものであった。

授業外に実施した研修には次のものがあった。なおこれらの研修には、9 月 1 日からサンクトペテルブルグ国立大学において 1 年間の交換留学を開始したばかりの筑波大生が 1 名（Ge-NIS（ロシア語圏諸国における産業界で活躍できるマルチ

リンガル人材育成プログラム）プログラム生。サンクトペテルブルグ国立大学の文学部に所属）参加した。

1. 日本総領事館表敬訪問および福島正則総領事による特別講義（9 月 5 日）

福島総領事からは、本研修日程の開始にあたっての危機管理について、また、ペテルブルグについて、モスクワやハバロフスク等の前任地と比較しながらの貴重なお話をうかがった。学生さんたちが活発に多くの質問をし、総領事が予定の時間を延長して対応してくださった。

2. 日本センター訪問および松原斉センター長による特別講義（9 月 9 日）

松原センター長より、ペテルブルグ郊外も含めて日系の企業が進出・展開している状況やロシア連邦内管区ごとの日本との貿易・経済協力の進展についてスライド等も利用して特別講義をしていただき、そのあとディスカッションを行った。

3. 日本センター付属日本語教室視察、学習者との交流会（9 月 9 日ほか）

日本センターで毎週水曜、土曜に日本語教室が行われておりその生徒は日系企業に勤務するロシア人が多数を占める。授業で、日本語に訳されたロシアの歌を習っているところで、ロシア人も本研修参加者もともに歌った。その後小グループに分かれて学習者たちと交流した。アニメ事情やロシアの若者の暮らしなど、興味深い話題が多かったほか、ペテルブルグではどこを見たらよいかなど、多くの具体的なアドヴァイスをしてもらっていた。本研修も恒例となり、3 週間共に観光しながら交流する良い機会という認識がロシア側に浸透して、この場で個々に連絡先を交換し今後の予定をそれぞれがたてていた。放課後市内に移動し、新規開店した「たい焼き屋」で続いて交流した。（その後は学生さん達どうし、週末など行動を共にして郊外などに行った模様。）

4. 正教会修復現場訪問、修復家からの説明（9 月 10 日）

今回の文化研修として、ノヴォデーヴィチィ女子修道院で聖堂の修復を担当し内部の壁画を制作しているボグダノフ氏に、特に修復中の聖堂を開けて案内・説明をしていただいた。ロシア文化の源である正教会キリスト教の特徴や、19 世紀の文化状況、現在の修復に関わる事情等、貴重なお話がうかがえ、また、完成（聖別）後は聖職者以外立ち入ることができない、秘蹟を行う祭壇のある至聖所も見せていただいた。

5. ヴァラーム島（ヴァラーム修道院）一日研修（9 月 17 日）

マイクロバスを借り、サンクトペテルブルグの北東ラドガ湖のヴァラーム島までの一日研修を行った。これはオプションとして希望者を募ったが全員が希望した。

陸路マイクロバス、水路水中翼船（ヴァラーム修道院所有）で、専門のガイドがついた。通常観光客や信者が訪れる中心聖堂や庭園のみでなく、今回は筑波大学文化研修ということで特別に許可が下り、修道僧が居住する庵をいくつか見せていただき、内部の壁画や祭壇を見学、食堂で食事を出していただき修道院の生活を垣間見る機会となった。

6. その他

上記活動に加えて、各自、時間割の都合が合う人がグループとなって見学を行っていったが、マリインスキー劇場でのバレエ「くるみ割り人形」鑑賞、白夜の市

内観光（夜中に橋げたが挙がる）等全員が参加したものもあった。大人数であったが互いによく助け合って行動し、危険もなく大学での授業以外の時間も充実したものとなった。

帰国後 10 月 18 日（水）、Ge-NIS プログラム第二期生、キルギスでの夏期語学研修受講生と合同で帰国報告会を行い、サンクトペテルブルグ研修について分担して準備した報告を行った。これまで生きてきた中で一番面白い体験だったと述べた者もいたほどで、参加学生たちは大きな刺激を得て今後のロシア語学習への強い動機を得たことがうかがえた。

＊本研修は「はばたけ筑大生」によるご支援をいただいた。記して感謝申し上げたい。

（文責 加藤百合）

平成 29 年度中国語夏季短期研修実施報告

文責：池田　晋

平成 29 年度の中国語夏季短期研修は中国・湖南大学において下記の日程で実施された。参加者は計 2 名、内訳は日本語･日本文化学類 1 名、国際総合学類 1 名であった。

当初提案されていた最低催行人数 5 名には達しなかったが、担当者間での協議の結果、2 名でも研修を実施できることとなった。参加者によれば、少人数ではあったが、その分湖南大学の教員・チューターと多く交流することができた、また大きなトラブルもなく安全に過ごすことができたということであった。

研修先　　：湖南大学（湖南省長沙市岳麓山）
参加費用　：約 30 万円

平成 29 年度湖南大学夏季短期研修日程表

9月1日（金）	出発
9月2日（土）	開講式、歓迎会
	授業：①～③基礎中国語／④～⑤会話／⑥中国文化（歌曲）
9月3日（日）	授業：①～③基礎中国語／④～⑤聴解／⑥中国文化（料理：餃子）
9月4日（月）	岳麓書院見学　および　長沙市内見学
9月5日（火）	授業：①～③基礎中国語／④～⑤会話／⑥中国文化（歌曲）
9月6日（水）	授業：①～③基礎中国語／④～⑤聴解／ ⑥中国文化（料理：楊裕興ラーメン）
9月7日（木）	岳陽楼見学
9月8日（金）	授業：①～③基礎中国語／④～⑤会話／⑥中国文化（舞踊）
9月9日（土）	授業：①～③基礎中国語／④～⑤聴解／⑥中国文化（料理：お粥）
9月10日（日）	ホームビジット
9月11日（月）	授業：①～③基礎中国語／④～⑤会話／⑥中国文化（書道）
9月12日（火）	授業：①～③基礎中国語／④～⑤聴解／ ⑥中国文化（料理：伝統長沙点心）
9月13日（水）	授業：①～③基礎中国語
9月14日（木）	試験、送別会
9月15日（金）	張家界へ出発（2泊3日）
9月16日（土）	張家界国家森林公園見学
9月17日（日）	張家界国家森林公園見学、長沙に戻る
9月18日（月）	帰国